風の如く

Junko Higasa

夏目漱石の人生の道の選択はどのように行われたのだろうか？まずは 12 歳（明治 12 年）に入学した一ツ橋中学（東京府立第一中学校）時代から振り返ってみよう。

その当時、東京唯一の中学校では、日本語の普通学を学ぶ「正則」と英語を学ぶ「変則」に分かれていた。漱石が入ったのは正則で、英語力の必要な東大予備門に入るのは難しい。そこで彼は正則をやめたが、しばらく二松學舎で好きな漢学を学び、受験が切迫するまで英語に着手しなかった。英語ができる兄の一人に習うも兄は癇癪持ち、漱石はやる気なしで続くはずもなし。そこで成立學舎に入ったが原書ばかりでちんぷんかんぷん。だが「その本に何が書いてあるか知りたい」一心で何とか奮闘して読破。

そして東大予備門へ及第した漱石は、ガリ勉派に対抗して、身体が虚弱だったにも拘らず好きなスポーツに明け暮れ、成績は降下する一方。挙句の果てに腹膜炎を起こし試験が受けられず、追試を頼むも事務方に受け入れてもらえず。「普段から勉強しない自分は信用がないからだ」と思い、人の信用を得る必要を感じる。そこで自ら落第を選んで勉強していると、今まで苦手だった数学が解るようになり、何事も真剣に取り組めば出来るのだと悟る。思い直した漱石は最も苦手だった英語と数学を克服した。

さて、それから東大進学にあたって、兄から「文學は職業にならない」と叱られて考え直すも「世間に必要とされ、しかも趣味を持った職業に従事してみたい」と思っていた。そして自分みたいな変物が、己を曲げずに生きられる道はないかと考えていたとき、駿河台の佐々木東洋と井上達也という医者が「変人なのに世間に必要とされ、人に喜ばれ、生活が成り立っている」のを見て、自分もあのように偉くなってみたいと思った。だが医者は嫌いだ。そこで好きな美術に通じる建築家になろうと決意した。ところがそれを「真性変人」である高校の同級生：米山保三郎に話すと「日本ではどんなに腕を振るってもセント・ポール寺院のような天下後世に残る建築はできない。それより文學の方が生命がある」と言う。衣食問題から建築家を志した漱石の言い分は彼の激論にあえなく撃沈。漢学や国文学はやりたくないので英文学へ進路を定めた。

それから進んだ東大は奨学金と東京専門學校の講師のアルバイト代で卒業。まもなく、高等師範の校長から教師の職を勧められたが荷が重いと断った。しかしその断りを頼もしく思われてさらに押され、教師ライフがスタートする。そのうち国費留学生としてロンドンに派遣されるが当地で英文学が嫌になる。そして現地で理学者：池田菊苗に出会い「幽霊のような文学」をやめて系統立った「文學論」を成そうと目覚めて決意する。帰国後はやはり一度は断ったが、親友：狩野亨吉が校長の第一高等学校教師と東大の講師を兼任。正岡子規生存当時「ホトトギス」に投稿した縁で、高浜虚子の依頼で同誌に『吾輩は猫である』を発表。一回限りのつもりが人気を博して長編となる。東大教授昇進間際、池辺三山の勧めで朝日新聞に入社して職業作家となった。

さて、内気を自覚していた漱石は、「自分の人生は他人が作ったようなものだ」と述懐している。時に叱られ、請われ誘われるまま。けれどそれは他人に流された人生とは違う。他人を受け入れ、自他共に生きた人生だ。風が炎の熱で起こるように、漱石の人生は、人間の情熱の炎によって生まれた風のようなものであった。　(2013.2.23)